

長岡京市西の京にある現在の水田を1メートル近く掘り下げるとき、灰色の粘質土が見つかりました。この土層の上面は、写真のように幅約30センチ、高さ約10センチの湾曲した高まりで、北と南に区分けされていました。高まりの南側には約20センチの段差があり、北側は南側より高くなっています。それに、高まりより北側と南側は、それぞれほぼ水平面になっていました。これはどうも昔の水田と、水田を区画していた畦畔のようだという判断をしました。そこで、古い地図や写真を探して、昔の様子を探ろうと努力しました。しかし記録に残っている水田は、すべて今の水田と同じで、調査地内は一枚の水田でした。このことから、明治時代以前の水田跡と考えられます。では、いつ頃の水田跡なのでしょうか。

発掘調査で見つかったこの水田跡は、厚さ約20センチ以上の、洪水堆積と考えられる礫層で埋め尽くされていました。この礫層からは、江戸時代の染め付け茶碗などが出土しました。また水田跡は、1メートル以上の厚い砂礫堆積の上にありました。この砂礫層は、調査地から東約100メートルにある小畠川の氾濫によるもので、出土した中国製白磁から、16世紀頃の堆積と考えられます。このような成果から、見つかった水田跡は、16世紀から17世紀の間に、小畠川の流路が変わったから、荒れ地を開墾した水田だらうと考えることができます。砂礫の上に堆積したわずか10センチ前後の粘質土を開墾し、水田化した当時の技術と勇気・努力の跡を垣間見るようにです。



▲西の京で検出した江戸時代の水田跡

また、この水田跡の粘質土層と、下にある砂礫層の間には、土層の乱れる部分も見つかりました。16世紀から17世紀頃に土層を乱した原因を探ると、慶長地震（1596年、M7.5）や、寛文地震（1662年、M7.6）が知られています。わずかな土層の乱れが、この大きな地震に結びつくかどうか、結論はでませんでしたが、時代考証が正しければ、可能性として有力です。

（なお、この調査では、佛教大学教授の植村善博さんに土層に関して現地で数多く教えていただきました。）